

タータンと文化の伝承

—グローバル社会における文化保護—

150321 三仙淳誠

序章

現在、日本において伝統工芸品は衰退の一途をたどっている。伝統的工芸品産業振興協会によると生産額のピークを迎えた1984年と比較すると2013年には5分の1のおよそ1,000億円程度にまで減少してしまっている。経済的な利益を見込むことができないなら、潰れていってしまうのが現実である。また、経済産業省の調べによると2009年時点で伝統工芸品の従事者は50歳以上が64%、30歳未満が5.6%となっている。高齢化社会が進んでいることもあるが、明らかな後継者不足である。働き手がいなければ続くはずはない。これらの例からも伝統工芸品の衰退は明らかである。また、グローバル化が進み様々な文化や安価な商品などが日本に入ってくることにより、衰退に拍車がかかっている。伝統文化の衰退はグローバル化した社会が抱える問題の1つである。

本論文では、このような問題を改善する手がかりを求め「タータン」を主題とし、論を展開していく。タータンはイングランドとスコットランドの対立や、ローランド地方とハイランド地方の対立など異なる文化が混在する地で発達してきた。異なる文化が混在するという状況から考えると、タータンが育まれたスコットランドはグローバル化に近い状況にあったと言えるであろう。伝統工芸の現状とスコットランドの特徴を踏まえたうえで、タータン繁栄の理由から見出す現代の「伝統文化」における問題の改善策を提示する。伝統文化の衰退のどこに問題があるのかと考える人もいるであろう。より便利で安価な製品の流入により伝統品とそれらが入れ替わり、より快適な生活になるという考えも納得できる。しかし、インターネットが普及し情報があふれる便利な社会になったからこそ、一見選択肢が多いように思えるが、流行に流されるなど自らの選択の幅は狭くなってきているのも事実である。そのような状況の中で果たして日本人が日本らしいと思える生活や職を選択肢から無くしてしまってもよいのだろうか。伝統文化を後世に伝え選択肢を減らさないためにも、伝統文化の保護・繁栄の有意性が感じられる。

タータンとはチェック柄の一種であり、日本ではタータンチェックと呼ばれることが多い。スコットランド伝統の柄である。日本でも百貨店の伊勢丹がタータンを用いた紙袋を使用していたり、日本で1980年代から1990年代に活躍したポップバンドであるチェッカーズ (THE CHECKERS) が衣裳として身にまとっていたりと親しみのある柄である。また、街を歩いてもタータンの服を着用した人を見かけることが多々ある。タータンチェックと聞いて様々なファッションブランドを連想する人もいるであろう。日常的にも馴染

みのある柄である。一地域の伝統的な柄であるタータンがなぜこのように広まったのかを本論文では明らかにしていく。そのうえで、伝統文化であるタータン繁栄の理由を基に日本の伝統文化が繁栄する手段について考察していく。

第1章ではタータンの基礎知識について論じる。タータンについてはっきりした定義などを説明できる人はほとんどいないはずである。そのため、タータンの歴史や現在のタータンについて論じ、どのようなものがタータンであるのかを示し、本論におけるタータンの定義を提示する。第2章ではタータン繁栄の理由を探っていく。スコットランドという特殊な地域性がタータンに及ぼした影響やロマン主義とタータン、タータンの変化、ファッションとの関連などからタータンが広まった理由について考察する。第3章では前章で述べたタータン繁栄の理由をもとに日本における伝統文化の今後の発展について考察していく。さらに、日本の伝統的民族衣装である着物・和柄のグローバル化の中での課題や、エコプロダクツとしての着物、ファッションとしての着物・和柄の価値を検証していく。

1 タータンについて

タータンという言葉聞いても何となく想像はつくがはっきりとしたことがわからないという人は多いだろう。柄の一種と言えはその通りではあるが、ただのチェック柄だけでなく歴史や民族の対立などタータンから様々なことを紐解いていくことができる。柄としての発展を見ていく前にどのようなものがタータンであるかはっきりさせておく必要がある。また、タータンが文化保護の参考になり得るのかを検討する必要もある。そこで本章では、第1・2節においてタータンの基礎知識や歴史を明示し文化保護の手がかりとなるか検討したうえで、第3節で本論文におけるタータンは何を表しているのかを定義付けしていく。

1-1 タータンとは

まず日本でタータンと呼ばれているものがどのようなものであるかを説明していく。日本においてタータンと切り離せない言葉がチェックである。タータンチェックという言葉に聞き馴染みがある人も多いのではないだろうか。しかしタータンチェックという言葉を使うのは日本人のみであるため海外では通じない。海外では **tartan** と言う。『Genius 英和大辞典』によると **tartan** は「格子縞」という意味とジャーナリスト用語で「スコットランドの」という意味がある。日本人の言うチェック柄を表す単語に **plaid** というものがある。この単語には格子じまという意味だけでなく格子じまの肩掛けという意味もある。チェックという日本語に似た **checked** や **checkered** という言葉も存在している。辞書の説明においても、両方が格子じまや市松模様という表記のみである。筆者がイギリスのアングリア・ラスキン大学に訪れたときの先生の話によると、日本人が言うチェックは英語では **plaid** であり **checked** や **checkered** は四角でできているチェックを表しているらしい。後者をもう少し説明すると具体的にブロックチェックやギンガムチェックなどがその例である。日本人は全てを一樣にチェック柄と言うが実際は使い分けがされているのである。海外ではタータンとチェックが使い分けられていること、またタータンがジャーナリスト用語でスコットランドを表していることからタータンはスコットランドに関係する特別な柄であると考えることができる。

次は言葉としてではなく、事物としてどういったものをタータンと呼ぶのかを説明していく。フリーライターであり、日本スコットランド協会にも所属している奥田（2013）によると、様々な色に染めたウール糸を綾織にしたチェック柄の織物の総称をタータンという。また、縦糸と横糸に使われている糸の本数と色、配色は同じでなければならない。極端な例で説明すると縦糸に赤、青、黄色の三色を使いこの順番で配列させたとしたら、横糸も赤、青、黄色の三色を使い順番も同じでないといけない。基準となるこの規則はタータンの一単位ということでセットと呼ばれる。セットの繰り返し方法は二パターン存在している。一つ目は同じセットを何回も繰り返すパターンである。2つ目は1、2、3、3、2、1のようにセットの順番が逆になり繰り返していくパターンである。前者は線対称のタータ

ンとなり、後者は点対称のタータンとなる。他にもタータンの太い帯をアンダーチェック、細い帯をオーバーチェックと呼ぶなど自由に作られている柄のようで細かい規則が存在しているのがタータンである。

似たような配色のタータンであっても一本の線の色が違うだけで全く異なった雰囲気醸し出す。糸の色、配色だけで決まる単純な柄であるが故に、使う色の数や配色を変えるだけで無限のパターンを生み出すことができる。無数に作り出すことができるため、国が柄を管理する登記局が存在している。奥田によるとタータンは現在登録制であり、2008年に制定された **Scottish Register of Tartans Act 2008** (スコットランド・タータン登録法) により保存、保護、登録が行われている。National Archives of Scotland (スコットランド国立公文書館) によって運営されている **The Scottish Register of Tartans** (スコットランド・タータン登記所) が登記局として活動している。登記局の前進となった組織として二つの民間団体が存在している。一つは **Scottish Tartans Society** であり、もう一つは **Scottish Tartans Authority** である。**Scottish Tartans Society** が 1960 年代に登録を始めるがトラブルで活動ができなくなる。もう一つは **Scottish Tartans Authority** である。重複して二つの団体が登記を行っていた時期もあるが、二つの団体が同じことをしているという点、また民間団体が行っている点において混乱を招いてしまうことがあった。特に **Scottish Tartans Authority** はタータン製造業者が中心となっていたため公平性を疑う声もあがっていた。そこで 2008 年に **Scottish Register of Tartans Act 2008** が制定されスコットランドの国管轄の組織が発足した。この登記局はスコットランドで作られたタータンのみを管理するのではなく、世界中のタータンが管理されている。日本で有名な伊勢丹のタータンもタータンとして認定を受け登録されている。他にもスペインの名門サッカークラブである FC バルセロナなど世界中のあらゆる企業や団体が独自のタータンを所有している。企業だけでなく個人で申請することも可能で結婚に記念にタータンを申請する人もいるほどである。申請は日々数多く申し込まれ、登録数は増え続けている。

言語としてのタータンの意味や使われ方だけでなく、タータンには細かい規則が存在しそれらを国がタータンの保護、保存、登録を行っていることからタータンはスコットランドを代表する文化であるとみなすことができる。また、世界中から申請が来ていることからわかるようにタータンが世界中に普及している柄であることは明白である。

1-2 タータンの歴史

本論文はタータンから見る、グローバル化における文化保護の手がかりを見つけることを目的としている。しかし、タータンが本当にグローバル化において参考になるのかという疑問が生じてくる。この疑問を払拭するためにはタータンがたどってきた歴史をみていく必要がある。そこで本節ではタータンの繁栄とグローバル化の関連性を明らかにする。

まず、タータンがどのようにして誕生したのかについて明示する。チェック柄やウールの綾織はスコットランド発祥のものと言えるわけではない。なぜなら紀元前 1200 年頃のも

のと思われるミイラが、カフカス地方で上質な格子柄の布地をまとった状態で発見されている。また、オーストリアのハルシュタットの岩塩鉱山からも、紀元前のものと思われる格子柄の布地が見ついている。エディンバラにあり、タータン博物館とも言われるタータン・ウィービングミル&エキシビションには、世界最古のタータンは紀元前 2200 年に中国北部で織られていたという記述があった。スコットランド最古のタータンと考えられているものは 1934 年にフォルカークで発掘されたもので、ともに発見されたローマ銀貨から推定すると紀元前 83 年から紀元 230 年頃のものとしてされている。また、語源の歴史からたどってもスコットランド特有のものではないことがわかる。tartan という言葉は布地の種類を表すフランス語の tiretaine か、スペイン語の tiretana に由来すると言われている。これらのタータンに近い言葉が使われている最古の文献は 1355 年のものと言われている。さらに「柄のない無地の緑色のタータン」という文面がウィルソン&サンズ社の記録に残っている。奥田 (2013) はいつから完全にタータン=多色使いの格子柄の布地になったのかは、わかっておらず、現在の考えでタータンとみなすことができる物が、タータンという言葉が使われる前から見ついていることから、タータンの起源がはっきりしていないとみなすことができると主張している。タータン発見の事例や奥田の主張を踏まえるとタータンが完全なスコットランド発祥のものではないにも関わらず、スコットランドを代表する文化の 1 つに昇華したと考えることができる。

ではなぜタータンがスコットランドを代表するものとなったのだろうか。これに関しては第 2 章で詳しく説明する。しかし、スコットランドで多く着用されていたことから伝統のものとなったことは間違いない。そのため、次にスコットランドでタータンが着用されていた事実についてみていく。タータンはスコットランドの中でも北部のハイランド地方と呼ばれる高地特有の布地であった。スコットランドの首都であるエディンバラはハイランド地方ではなく、ローランド地方に分類される。現在スコットランドの民族衣装としてとらえられているタータンのスカートであるキルトが成立する前に、ハイランドの衣裳は様々な変遷をたどってきた。

まず、衣服の形態を規定する 1 つの要因である自然環境について説明する。ハイランドは荒涼な岡の起伏が連なる地形であり、荒々しい自然美を形成している。しかし、樹木はあまり見られず、不毛な原野に生える植物のヒースが生い茂るなど人間が住むのに適しているとは言い難い環境である。また、ハイランドは低気圧の経路にもあたり、多量の水蒸気を含む偏西風が山地にぶつかって上昇し雨をもたらす、地形性降水の影響もあり年間降水量が多い。このような過酷な環境の中で形成されてきたのがハイランドの衣裳である。このような環境に撥水性があり汚れにくく、優れた保温性をもつウールは適した素材であると言える。

服飾史研究家の河原ら (1994) によると、キルトの前進となる belted plaid は 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて着用されるようになった。plaid とはスコットランドの用語であり、比較的きめの粗い綾織の布を表している。幅約 1.8m、長さ約 3.5 から 5.5m の大きさ

のタータン一枚布を裁断も縫製もせず、そのまま膝までの長さに丈を合わせ、腰回りにベルトでとめる形態の服装のことである。頭にかぶってフードやマントにして着用するなど気候に合わせた着こなしがされてきた。また、野宿するときには毛布として使うこともできる。また、河原らは **belted plaid** が荒野での生活に適した衣服であったと主張している。確かに現代よりも服などを大量に入手することが難しい時代に1つの布を様々な用途に用いることは理にかなっている。自然で閉ざされたハイランドの地ではなおさらのことではないだろうか。

このようにハイランドの気候ならではのものとして発達したタータンを含むプラッドやキルトであるが一時は衰退の傾向にあった。このことは次章で詳しく論じるため、ここでは概要のみを示す。1715年と1745年に起こったジャコバイトの反乱をきっかけに、ハイランド文化が反乱の象徴とみなされ、1746年にハイランド文化に属するもの（ゲール語、タータン、キルト、プラッド、バグパイプ等）を禁止する法律が制定された。この禁止令は1782年まで続いた。その中でタータンを織る技術や残っていたタータンの布地などが失われていき、タータンは壊滅的な打撃を受けた。ジャコバイトの反乱のきっかけはスコットランドとイングランドの王位継承に関する対立である。このように一度は消滅しかかったタータンであるが、1822年にジョージ4世がエディンバラを訪問した際に、ジョージ4世自身がタータンを身に着けるといふ情報が流れると同時にタータンを買い求める人が急増するタータンブームが起きた。よって1822年をタータン復活の年とみなすことができる。また、19世紀からはファッションにタータンが取り入れられるようになり、現在でもイタリアのファッションブランドである **VERSACE** が2018の秋冬コレクションにおいてクランをモチーフにしたデザインを発表している。さらに商業法学者の **Petty (2004)** によるとアメリカや、カナダ、オーストラリアにおいて **National Tartan Day** が設けられている。また、前節で述べたようにタータン登録の依頼は世界中から届いている。これらの事実からも文化の対立により消えかかった文化が復活した例としてタータンを捉えることができる。

スコットランドではイングランドとの対立だけでなく、スコットランド内でもローランド地方とハイランド地方の対立も存在していた。このようにスコットランドは文化の対立が激しい地であると言える。タータンが衰退の傾向をたどった要因もイングランドとスコットランドの文化的対立である。情報化社会の中で文化の情報が交錯し、様々な文化が取り入れられるグローバル化社会においても文化対立が生じていると考えることができる。日本だけでなく、世界中で西洋文化が入り込むことによりそれまで存在していた文化の衰退が起こっている。そのような状況の中でタータン繁栄の理由を考察することは文化保護の参考になるはずである。

1-3 本論文におけるタータンの定義

ここまでにも頻繁にタータンという言葉を使用してきた。それは日本でも多く目にする

ことがあり、日本人でも聞いたことのあるタータンがどのような物かを説明するためである。しかし、タータンという言葉をどのような意味で用いているのかははっきりとさせる必要がある。そのため本節では本論文におけるタータンの定義付けを行っていく。タータンの定義として3つの選択肢があると考えられる。1つは登記局に登録されているもののみをタータンとするものである。2つ目はスコットランドで作られたもののみをタータンとするものである。3つ目は柄としての定義のみを使用するものである。以下ではこの3つの選択肢について検討していく。

まず1つ目の登記局に登録されているかどうかについてである。前節でも述べたが現在スコットランドが国としてタータンの登録を行う登記局が存在している。登記局で登録されたもののみがタータンと認められ、名乗ることができるというのは事実である。王族であるスチュアート家のタータンであるロイヤルスチュアートや、日本でも有名なバーバリーチェックも登記局において登録されている。世界的に名の知れた企業や王家が登録を行っていることもあり、一般的なタータンの定義としては有力である。しかし、本論文の目的であるグローバル化における文化保護という視点で考えると、登録されているもののみをタータンとすると範囲が狭すぎる。文化の広まりにおいてそれを認識するのは一般の人々である。その場合一般の人々は、タータンが登録されているかどうかなど知る由もない。また登録が始まったのは20世紀後半であり、歴史的に見て最近のことである。それ以前のタータンを見ていくには基準がなくなってしまう。そのため、本論文における定義とするには不十分である。

2つ目はスコットランドで作られたもののみをタータンと捉える見方かどうかである。筆者がスコットランドでタータンに対する意識調査を行ったとき、タータンが世界に広まっていることをよく思わないという人がいた。その理由は「タータンの価値が下がるから」と言っていた。タータンとはどうあるべきかという質問をしてみると、「スコットランドに古くから伝わる伝統的なもののみがタータンである」という答えが返ってきた。確かにある地域の伝統のものが他の地で作られたにも関わらず、同じものと名乗られることは疑問に思うかもしれない。この意識調査の回答からスコットランドが地元の人々とそれ以外の人々ではタータンに対する認識が違う可能性があるかと理解できる。地元の人々が考えるタータンの定義こそ本来正しいものであるべきかもしれない。しかし、この定義もグローバルの視点でタータンを捉える場合狭域すぎる。そのため、本論文におけるタータンの定義とするには適していない。

3つ目は柄としての定義のみの使用についてを検討する。柄としての定義は前節でも論じた通り、縦糸と横糸に使われている糸の本数と色、配色が同じものである。奥田(2013)以外にも自身のタータンが登記局によって登録されている石田洋服店がホームページにおいて、タータンは縦糸と横糸が同じ配色で正方形のチェックである以外には制限はないと記載している。日本人のようなスコットランド外の人にとっては、タータンを柄としてしか認識していないことがよくわかる。また、外国人である日本人が考えるタータンの定義

が外国におけるタータンの認識と捉えることができる。グローバル化における文化保護を考えると外国からの視点が大切になってくる。そのため、タータンが世界に広まっていた理由を考察するにはタータンの定義として柄としての見た目がタータンの規則に当てはまっているものとするのが適している。

現代的なタータンの定義と国内におけるタータンの定義、また国外におけるタータンの定義という 3 つの選択肢から本論文におけるタータンの定義を検討してきた。どの定義も場合によっては適切である。しかし、グローバル化により様々な文化と触れ合う機会が多い現代において生活に不要な文化は廃れていく傾向にある。そのような状況の中で地域だけではなく世界的な視点こそ文化を繁栄させるうえで大切である。そのため以降本論文においては外国から見たタータンの定義とみなすことが可能な、見た目の柄としてタータンの規則に当てはまるものをタータンと定義する。

本章ではタータンの基礎知識と歴史をもとに、タータンがグローバル社会の中で文化保護の手がかりになり得るかを検討してきた。文化の対立で一旦消滅しかかったタータンが復活した理由を探っていくことは文化保護の手がかりになるという結果を得ることができた。さらに、本論文におけるタータンの定義付けを行った。本論文の目的はタータンからグローバル化における文化保護の手がかりをつかむことである。そのため世界的な視点から考え、タータンの定義を見た目として柄の規則が当てはまるものとした。次章では本章で定めたタータンの定義をもとにタータンが繁栄した理由について考察していく。

2 タータン繁栄の理由

前章ではタータンがグローバル化における文化保護の参考になり得るという結果を得た。また、本論文におけるタータンの定義は柄としてタータンとみなすことができるものとした。前章の結果を踏まえ本章では本論文の目的であるグローバル化における文化保護の手がかりを探るために具体的にタータンが繁栄していった理由を探求していく。その理由として4つの視点からタータンについて考察していく。4つの視点とは地域性とロマン主義、変容性、ファッションである。

2-1 地域性から見るタータン

本節では地域性の視点からタータン繁栄の理由を分析していく。まず、タータンが育まれたスコットランドの地域性について明示する。タータンはどのような環境で一地域の文化になったのか、またどのような時代で繁栄していったのかを明らかにしていく。そのうえで、タータン繁栄の理由について考察していく。第1章第2節で触れた、タータンがスコットランドの文化になった理由やタータン衰退の背景についても本節で明らかにしていく。

まず、スコットランドを含むイギリスとはどのような国であるかについて論じる。日本人がよく言うイギリスの正式名称は、「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国 (the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)」である。イングランド、スコットランド、北アイルランド、ウェールズの4つが合わさった国で、地理的に見るとグレートブリテン島とアイルランド島北部からなる国家である。イギリスは主権国家としてはひとまとめであるが、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドがそれぞれ大幅な自治権を所持している。イギリスの国旗であるユニオンジャックもイングランド、スコットランド、アイルランドの国旗が合わさったものである。また、スポーツの国際大会においても様々な形態で出場している。オリンピックはイギリス代表として参加しているがサッカーの世界カップにはイングランド代表やスコットランド代表など地域別で参加している。1つの国家の中に4つの国が存在する、複雑な形態をとっている。日本人がイギリス人のことを **English** と表現する場合があるが、厳密にはイングランド人のことしか表していない。生活科学研究家の大山 (2015) によると、イギリス内ではイングランド人がマジョリティーであるのに対しスコットランド人、ウェールズ人、北アイルランド人を指すナショナルマイノリティが存在していて、自治権や独自の文化・言語が公に認められるなど強力なマイノリティの権利が存在している。このように1つの国家内に3つのナショナルマイノリティが存在し、それぞれの文化の存在が認められていることからイギリスは様々な文化が入り混じる特殊な地域と言える。この状況は西洋文化という強い影響力を持った文化により西洋化が進行しているグローバル化に近い状態と言えるはずである。

次にスコットランドに焦点を当てる。イギリス経済史学者である高橋 (2004) は、スコ

ットランドを異人種混成体であると主張している。スコットランド最初の定住者はピクト人であるとされている。その後5世紀にケルト系のスコット人、8世紀にアングロサクソン、11世紀にアングロノルマンが移住してきた。歴史的な人種流入の流れからみてもスコットランドに様々な人種が存在していたことは間違いない。また、イングランドに多い人種はアングロサクソンである。イギリスは4つの国が存在する多様な国であると先に論じたが、スコットランド内にも文化の異なる2つの地域が存在していた。前章でも何度か触れたがローランド地方とハイランド地方である。地理的に見るとローランド地方はイングランドに近い、平地のことを指しており、ハイランド地方は閉ざされた起伏が連なる地形である。ローランド地方はアングロサクソン、アングロノルマンが多く農業や商工業中心の生活を送っていた。言葉も英語に近くイングランドよりの生活と言える。それに対してハイランド地方では放牧が主流で言語も12、3世紀にはスコットランドで多く話されていたゲール語を使用していた。また、ハイランドはどちらかと言うとアイルランドに近い生活を送っていた。両者の生活の差異による対立が存在していて、ハイランド人はローランド人をイングリッシュとののしり、ローランド人はハイランド人をアイリッシュとののしった。国内においても文化の対立は存在していたが、それ以上に反発すべき相手があり、それがイングランドであった。その良い例が1320年の「アーブローズ宣言」である。この宣言はスコットランド王国によるものである。内容はどのような王でもイングランドに隷属を示す場合直ちに人民の手によって退けられるべきであるというもので、人民主権の宣言であった。

敵の敵は味方と言われるようにイングランドという強大な敵に対してはローランドもハイランドも関係なく、お互いの垣根を取り払った一例と言えるのではないか。また、ハイランドとローランド両方に共通する対立相手がいたことにより、スコットランドとしての意思が1つにまとまり、お互いに対する反感もイングランドに対抗しているときは薄れていたと考えることができる。

スコットランドとイングランドの対立の中でスコットランド文化に大きな影響を与える出来事が2つ起こる。1つ目が合邦で、2つ目が1715年と1745年に起こったジャコバイトの反乱である。まず合邦について論じる。合邦とは複数の国家が1つに統合されることである。この合邦がイングランドとスコットランドにおいても起きた。高橋によると、同君連合によりスコットランド王ジェームズ6世がイングランド王も兼任するようになった。このような状況でスコットランドとイングランドの議会が合同になるきっかけとなる出来事が2つ起こった。1つ目はダリエン計画の失敗で、2つ目はイングランドによる外国人法の提示である。ダリエン計画とはスコットランドの経済状況が厳しい中で実業家のウィリアム・パターソンが発案し、反合邦派の政治家アンドリュー・フレッチャーが後押しした計画である。内容としては中米のダリエンを貿易コロニーにし、太平洋貿易を独占しようというものであった。この計画が失敗に終わりスコットランドの経済状況はさらに厳しいものとなった。外国人法とはイングランドがスコットランドに対して合同準備委員会を任

命しなければ外国として扱うといった内容の法律である。この 2 つのきっかけによりスコットランドは合邦を認めざるを得ない状況に追い込まれてしまった。そして 1707 年に大ブリテン連合王国議会が形成された。また、高橋は議会の統一によりそれまで以上に「スコットランド人意識」が芽生え、政治的國家の消失と引き換えに文化的國民が誕生したと主張している。さらに河原ら（1994）は連合の形式上はスコットランドとイングランドは対等であるが、スコットランドに対する風当たりは強く、政治的にも不利な立場であったと主張している。

自分たちの手で統治する国を失ってしまったことや、立場としても対等ではないといった劣等感から、自分たちはイングランドに支配されているわけではないということを示すためにもスコットランド人はイングランドとの違いを見せつける必要があったと考えられる。

次にジャコバイトの反乱について考察する。河原らによると、反乱が起こるきっかけとなった出来事は、スコットランドの王家がスチュアート家からドイツのハノーヴァー家に変ったことである。ジャコバイト主義とは、君主の座は君主固有の血統に準じて決定されるべきであるという考え方である。このような考え方のもと、王家が変わることに対して不満を持った人達が起こした反乱がジャコバイトの反乱である。そして反乱者はジャコバイトと呼ばれた。1 回目の反乱が 1715 年に起こるが失敗に終わってしまった。2 回目の反乱が 30 年後の 1745 年に起こるが、これも失敗に終わる。この反乱にはハイランド地方に住む人々も関与していた。スチュアート朝の復権を目指し、ハイランド氏族も協力をした。2 回目の反乱では 8000 人ものハイランド氏族が集結した。河原らは反乱軍の主力がハイランド人によって構成されていたこともあり、英国政府に対してハイランド人が大きな恐怖を与えたと主張している。英国政府は再び反乱が起こることを恐れ、武器だけを奪うのではなく、ハイランドを象徴するクラン姓やタータン、キルト、バグパイプなどの使用も禁止した。また、反乱の際にハイランド人がタータンを身にまとい団結の象徴としていた。タータンは特徴的な柄であり、見た目として目立つため、政府に印象に残ったと推測される。これらがタータン衰退の背景である。禁止令により、ハイランド地方の伝統や習慣といった文化は衰退していったが、禁止令がハイランド文化にプラスの影響を与えたことも確かである。高橋はタータンやキルトが禁止令により箔が付きローランド地方の貴族が身に着けるようになったと主張している。また、河原らは、ただの日常着であったはずのタータンが、反乱により団結の政治的シンボルになり、やがて民族的アイデンティティの象徴へと変化していったと主張している。禁止令はローランド地方やイングランド、女性に対しては適用されなかったこともタータンに箔がついた 1 つの要因であると考えられる。奥田（2013）はハイランド地方への同情でタータンを身に着ける人も現れたと主張している。

禁止されたハイランド文化をローランドの人々が見捨てなかった要因として、ローランド地方にもジャコバイトがいたことも考えられる。しかし、それ以上にスコットランドと

イングランドの対立の中で、イングランドに近い暮らしをしてきたローランド地方の人々が、イングランドとは違うハイランド地方の文化を自分たちの文化であると認めることによりイングランドへの対抗心を示したことが要因として大きいと考えられる。差異を示すために用いられたのがハイランド文化であり、ハイランド文化がスコットランド全体の文化と認められるようになった。これが、タータンがスコットランドの文化になった理由であると考えられることができる。

アープロース宣言や合邦、ジャコバイトの反乱の例からスコットランド内でのローランド地方とハイランド地方の対立に比べ、スコットランドとイングランドの対立の方が根強かったことがわかる。文化的な対立の激しいスコットランドという地でタータンはスコットランドのアイデンティティとしての価値が見出された。他の文化と多く接触し、摩擦や対立が生じていく中で他との関わりを持ってこそ文化の独自性を見出すことができるのではないか。よって、タータンが繁栄した理由の1つとしてスコットランドという特殊な地域における文化的対立を挙げることができる。グローバル化における文化保護においても同じことが言えるはずである。グローバル化において他文化に触れる機会も多い。そういった状況の中で他文化との比較により、自文化の独自性を見出すことが可能なはずである。独自性の中からタータンで言うスコットランドのアイデンティティのような文化の価値を見出すことが可能であれば、文化の存在価値が生まれ消滅まではしないのではないだろうか。

2-2 ロマン主義とタータン

前節ではスコットランドという文化対立の激しい地で禁止令が敷かれたことがタータン繁栄の理由であると論じた。1746年に敷かれた禁止令は1782年まで続いた。また、1822年のジョージ4世によるエディンバラ訪問時にタータンブームが起きたとされている。タータン禁止令が敷かれた後にタータンが復活するまでと同時期に盛んになった思潮にロマン主義がある。世界的思想の流れとタータンの繁栄が大きく関係していると考えられるため、タータンと思潮との関係を論じていく。そのため本節ではロマン主義の視点からタータン繁栄の理由を探求していく。

ロマン主義とは18世紀末から19世紀半ばにヨーロッパを中心に展開された風潮であり、想像力や感性などの抽象的な物を肯定する考え方である。ロマン主義研究者のブリュノ・ヴィアール(2012)によるとロマン主義が欲望を向ける対象は7つ存在している。その7つとは情熱恋愛、新精神主義的形而上学、自然の感情、時間あるいは空間における異郷の探求、社会のユートピアと流血のバリエード、自殺、詩と芸術の崇拝である。そのためロマン主義文学の主題として主に扱われたものは、絶望的な愛や情熱的な愛、超自然や自然への憧れ等である。ロマン主義では中世思考や物語性、異国性などから新たな現実を発見し、自分のアイデンティティを想像力により追い求めるという傾向があった。時間的にだけでなく、空間的にも遠いものへの憧れもまた、ロマン主義の構成要素の1つであった。

ロマン主義の発端にはフランス革命の生んだ恐怖政治やナポレオンという独裁者の出現がある。また、18世紀半ばに起こった産業革命で合理化された社会を否定する意味合いもロマン主義には含まれている。

ロマン主義が普及していた時代の中でスコットランドはロマンの国とみなされるようになった。スコットランドがロマンの国としてみなされるようになったのにはいくつかの理由が存在している。その中でも大きな役割を担ったものは文学であると考えられる。特に大きな影響を及ぼしたと推測されるのが『オシアン』とウォルター・スコットである。これらがどのようにスコットランドをロマンの国と印象付けることに作用したのか検証していく。

1つ目の『オシアン』について探求する。イギリス経済学史研究者の高橋（2004）によると、『オシアン』とは英雄であるオシアンが語り手の叙事詩の通称である。ハイランドの住民であった、ケルト人が話すゲール語で書かれたものを英語に翻訳したものとされている。『オシアン』は捏造された文学であるという考えが主流であるが、捏造されたかどうかは本節の論点ではないため、そのことについて詳しくは言及しない。内容としては3世紀頃のスコットランドで活躍した西ハイランドの英雄フィン王一族の物語詩であり、勇猛で気高い戦士の国内外での戦いが描かれている。作品の中で雄大な自然も表現されている。1760年に最初の『オシアン』とされている『ハイランドで採集された古代詩断章』が出現した。1762年には叙事詩『フィンガル』が刊行され、更に2年後の1764年に『テモラ』が刊行された。これらを総称して語り手の名から『オシアン』と呼ばれるようになった。最初の『オシアン』の出現から19世紀に入る40年余りでヨーロッパ9か国語に翻訳されるほどの人気であった。その当時子供にオスカルやマルヴィーナなど『オシアン』の登場人物の名前を付けることが流行した。ロマン主義とは対照的な考え方とされている古典主義の知識人も『オシアン』に夢中になった。古典主義の知識人たちが『オシアン』の虜となった理由として高橋は登場する古代人が、ルソーの「高貴な未開人」を連想させ、新鮮な原始の感動に満ちた世界が表現されているためと主張している。対照的な考えを持つ人達が『オシアン』を読んでいたことから『オシアン』の人気は明らかである。

『オシアン』の舞台はスコットランドである。そのため、当時『オシアン』を読んだ人達にとっては『オシアン』の印象をそのまま、スコットランドのイメージとして当てはめていたのではないかと考えられる。また、『オシアン』がヨーロッパで人気であったことからヨーロッパ中に『オシアン』の印象を、スコットランドのイメージに当てはめていた人が多く存在していたと推測される。

さらに『オシアン』とロマン主義の関連について分析する。英国文芸研究者の横川（2000）によると、スコットランドにはゲール語やスコット語、ノース語、スコットランド英語など様々な言語が存在していた。その中でゲール語の文学とは民謡などの伝承文学が主で、歌い継がれるものが多かった。ゲール語を話す人が多いハイランド地方に対し、ローランド地方では11世紀には英語化が急速に進み、14世紀にはスコットランド北東部のインヴァ

ネスまでが英語圏になっていた。スコットランド英語が宮廷公用語となり、ゲール語はほとんど話し言葉のみに限定されていった。横川は宮廷詩人たちがスコットランド英語を用いて詩を作り、わずかではあったがスコットランドにおける洗練された詩が生まれていったと主張している。また、ゲール語の民謡や韻文による物語をスコットランド独自の文学と呼べなくはないが、英語に飲み込まれることを拒む大衆のつぶやきの域を出なかったと主張している。

これらの事実からわかるように、ゲール語で書かれた優れた文学作品が存在しているとは考えにくい。このような状況の中、ゲール語で書かれたとされている『オシアン』は言語観点からも物語性が含まれていると考えられる。言語の物語性とは、言語としての発達が未熟であったゲール語で『オシアン』という優れた文学が書かれたことである。これはロマン主義が欲望の対象に向ける 7 つのうち時間あるいは空間における異郷の探求と詩と芸術の崇拜にあてはまる。そのためロマン主義の対象となったと考えられる。言語や文化の対立がロマン主義を満たしていたこと以外にも内容もロマン主義に当てはまっていたことが考えられる。『オシアン』の舞台はハイランド西部という閉ざされた地域であり、訪れることが困難であることから空間的に遠い存在であり、作品の中で雄大な自然が表現されていたこともロマン主義の考えを満たす要素であったと考えられる。

次に 2 つ目のウォルター・スコットについて論じる。まずは生い立ちについてである。スコットは 1771 年にエディンバラの法律家の息子として生まれた。生まれ育ったのがイングランドの諸制度の影響を直接受ける国境域であり、国境域に残っていたクラン姓が解体される時期でもあった。また、法律家である父の依頼人には多数のジャコバイトもいたことからハイランド地方の文化に触れる機会があった。法律家の家に生まれたこともあり、スコット自身は法律家と小説家の両立を図った。小説家としてスコットランド各地に足を運び、その地域ならではの民謡や物語に耳を傾けた。『最後の詩人の歌』では、国境域のクランに伝わる武人譚をまとめた。また、『湖上の麗人』では民謡において歌い継がれてきた騎士道物語をもとに、ハイランド地方を舞台にしたゲール人とサクソン人の物語を描いた。1814 年から 1829 年にかけて 30 巻近くの歴史小説を書き上げ、スコットランドの歴史という限られた題材で世界的人気を博した。横川は、スコットは 17 世紀以来失われてきたと言われているスコットランド国家のアイデンティティと自身の個の回復を求めて懸命に戦ったと主張している。

スコットの小説が世界的に人気となった理由もロマン主義の影響があると考えられる。ヨーロッパ文学研究者の金沢（1989）は、ウォルター・スコットはロマン主義を代表する作家の一人とみなすかどうかには議論の余地があるが、当時の読者が彼の作品に超自然的なものへの志向を認めたことは事実であり、ロマン主義と無縁とは言えないと主張している。更に金沢は、歴史を題材とした小説が読まれるようになった背景にはフランス革命やナポレオン戦争、それらにより波及しヨーロッパ全体で起こった民族的抵抗の影響により、歴史体験をしたという認識が広まり歴史に関心が高まったことがあると主張している。

確かに革命という時代の変換期を体験することにより、歴史を過去のものとしてのみ捉えるのではなく、全く異なる過去であっても現在と変化の連続により繋がっていると感じる可能性がある」と解釈できる。このようにフランス革命が理由で歴史への関心が高まった。ロマン主義もフランス革命の影響を受けている。ロマン主義の考えに当てはまるのが、時間的にも空間的にも遠いものへの憧れである。ウォルター・スコットの小説はロマン主義の考えに当てはまっており、その影響により世界的に人気になったと考えられる。

『オシアン』もウォルター・スコットの小説もスコットランドが舞台である。ロマン主義の影響によりこれらの作品が読まれ、作品が読まれることにより舞台であるスコットランドがロマンの国としてのみなされるようになった。『オシアン』とウォルター・スコット、スコットランド、ロマン主義の3つがお互いに関わりあっていたと考えられる。そのためスコットランドがロマンの国とみなされるようになった理由としてロマン主義の影響で読まれるようになった文学の舞台がスコットランドであったことを挙げた。小説の舞台としてスコットランドがロマン主義の対象になったことから、実際にその地域で普及していた文化もロマン主義の対象になり得ると考えられる。そこにはタータンも含まれている。ロマン主義の影響でスコットランドを舞台とした小説が世界的に人気になったこと、ロマン主義という思潮の流れにハイランド文化が適応していたことがタータン繁栄につながったと考えられる。そのため、時代の思潮に乗ることがタータン繁栄の理由の1つであると理解できる。

2-3 伝統とタータン

前節では思潮とタータンの関係について分析した。タータンをロマン主義の対象とみなすことができると論じたが、本節では変容性の視点からロマン主義の対象としてのタータンはどのような変遷でスコットランド伝統のものとなったのかについて論じていく。文化保護を考える場合、その文化の伝統性の考慮は必ず必要なものとなってくる。そのため、タータンと伝統の関係性からタータン繁栄の理由について探求していく。

そもそも伝統とは何か。三省堂が発行する『スーパー大辞林 3.0』によると、伝統とは「ある集団・社会において、歴史的に形成・蓄積され、世代をこえて受け継がれた精神的・文化的遺産や習慣」である。辞書による定義を見る限り、伝統とは歴史があり昔から守られてきたものという印象を受ける。経済史・社会史学者であるエリック・ボブズボウム他(1992)は、伝統とは長い年月をかけて形成されたものと思われ、そう言われているものであるが、ごく最近に成立していたり、またときには捏造されたりしたものもあると主張している。タータンの伝統とは言葉通り、歴史があり昔から守られてきたものなのか、それともボブズボウム他の主張のように創られた部分があるのかについて検討していく。

まず、キルトについて論じていく。キルトとは『スーパー大辞林 3.0』によるとスコットランドの民族衣装で男子が着用する格子じまのスカートである。要するにスコットランドの観光ガイドなどで目にするのできるタータンのスカートのことである。キルトはど

のような過程で生まれたのか。第 1 章第 2 節でも述べたようにキルトの前身となったものはプラッドであり、タータンの大きな一枚布をまとったものである。一枚の布をベルトで止めるだけのプラッドは裁断などが必要なく、安く手に入れることができるため、多く普及した。これらが着用されていた頃、タイトのように足に密着したタータンのズボンであるトゥルーズも普及していた。トゥルーズは身体にあった採寸や裁断、縫製が必要なため、プラッドに比べて高価であった。プラッドやトゥルーズが存在している中でキルトを開発したのはイングランド人のトマス・ローリンスンで 1730 年前後であると言われている。キルトはプラッドの肩掛けの上半身部分と下半身のスカート部分を分断することによって生まれた。

ローリンスンはイングランド北西部のランカシャーで製鉄業を営んでいた。1727 年に、製鉄に必要な燃料木炭を求めて、スコットランドのハイランド地方に位置するインヴァネスに炉を作り地元民を雇った。地元民の着用するプラッドでは、ベルト付きの肩掛けが邪魔になり作業に支障がでるため、ローリンスンはインヴァネスの軍の仕立て屋を呼び、衣裳の改良を行った。その際に誕生したのがキルトである。キルトはプラッドの利点である手軽さと便利さも持ち合わせていたこと、ローリンスンのパートナーであるクランの族長もキルトを着用したことからキルトはハイランドやローランド北部に広まっていった。

高橋（2004）はこのキルト起源説に対して有力な反論はなく、他の起源があるにしても同時多発的に 18 世紀前半に発生したと主張している。また 1794 年にロスシー・ケイスニス防衛軍という 600 人程度の地方部隊を結成したサー・ジョン・シンクレアはハイランド衣裳史の研究者でもあり、軍の制服としてキルトではなくトゥルーズを軍の制服として採用した。その理由はキルトよりトゥルーズの方がはるかに古い歴史を持ち合わせているため、という主張からである。これらの事実からもわかるように、スコットランドの民族衣装の代表とされているキルトが純粋なハイランドの伝統と言うには無理がある。

キルトがイングランド人によって生み出されたという説が有力であること、またその目的が工場での労働という商業目的であったことから、キルトは商業的目的により伝統が変化させられた例であると考えられる。さらに、プラッドの手軽さや便利さを残しつつ、作業の邪魔であった肩掛けの部分を取り除いたことから、伝統の要素を入れつつもより便利になるように変化させた例と考えることができる。

また、クランタータンにも伝統性を疑う余地がある。クランタータンとは同じ氏族（クラン）の人間は同じタータンを身に着けていたため、氏族ごとのタータンが存在するというものである。河原ら（1994）によるとタータンの種類は基本的に氏族・用途・身分によって区別され、同じ氏族は固有のタータンを身にまとっているため、タータンを見ただけでその人の出身地やどの氏族に属しているか識別できるという。また、クランタータンが成立する前には帽子の横に付けた植物の小枝が氏族を識別するのに使われていた。小枝の例からもわかるように物で氏族の識別を行っていたのは確実である。また、染色の技術が発達していない時代に、約 300 存在していたと言われる氏族をはっきりと区別するタータ

ンが存在していたかは疑問が残る。クランタータンの発生は、氏族が住んでいた土地に生えている植物を染色に使っていたことにより地域差が出たことが始まりと言われている。地域により、染色に違った植物を使っていたことからある程度の氏族の識別は可能であるが、各氏族独自のタータンを意図的に作っていたとは言い難い。また、高橋（2004）は18世紀前半の氏族の肖像画には同じ氏族に属する人であっても違ったタータンを身に着けているものが多々見られると主張している。

これらのことからクランタータンは18世紀前半までは、氏族による違いは確かに存在していたが、厳密に区別できるものではないと考えることができる。しかし、1746年に出されたハイランド文化の禁止令以降に厳密なクランタータンが生まれたと考えられる。河原らは禁止令の期間に古来のタータンのほとんどは忘れられてしまったと主張している。また、禁止令解除後に織物業者が氏族毎に異なる柄を売るようになったとも主張している。美術史研究者の Quye ら（2003）は、スコットランドでタータンを含むテキスタイル産業は18世紀から19世紀にかけて発達していったと主張している。Quye らの主張や禁止令からクランタータンの成立によりタータンの伝統が商業的用途に変化した例と考えられる。また、クランタータンが成立した要因の1つとしてハイランド連帯が考えられる。ハイランド連帯とはスコットランド軍の一種であり、禁止令は軍隊には適用されなかった。18世紀中に100以上ハイランド連帯が結成され、連帯ごとに異なるタータンを身に着けていた。軍事にタータンが用いられ、連帯が地域ごとに存在していたことから、氏族ごとのタータンを着るきっかけになったと考えられる。

もともと存在していたクランの区別を利用し、それをタータンにも適用させ、クランタータンを生み出すことにより織物業者が売れるタータンを作り出した。資本主義社会の中で、タータンの伝統を変化させ、商業的に需要があるものへと転換させていったことがタータンの繁栄に大きく関わっていると推測させる。また、商業的な需要を見出すことができた理由として、禁止令解除後にクランタータンを織物業者が売るようになったことからイングランドとの差別化があると考えられる。

キルトにしても、クランタータンにしても伝統とは違う形で商業的要素や軍事的要素を含みつつ近代化していった。捏造された伝統とまでは言えないにしても、時代の流れと共に伝統が変化していったことは事実である。現在の視点から考えると禁止令が敷かれた1746年からタータン復活とみなすことができる1822年は昔であると捉えることもできる。そのためキルトにもクランタータンにも歴史があり伝統的なものとみなすこともできるが、昔から変わらないものが引き継がれてきたわけではないことは確かである。

次に現代的な視点からタータンと伝統の関係性について論じていく。ハイランドの文化を現在においても目にすることができるものの1つにハイランド・ゲームズがある。ハイランド・ゲームズとは丸太投げやハンマー投げなど、強さを競う競技が組み込まれたスポーツの一種である。5月から9月の間にスコットランド各地で開催されている。出場者はタータン柄のキルトを身に着けている。ハイランド・ゲームズの原型は12世紀から18世紀

半ばまでにできあがった。ハイランド・ゲームズ発生当初の目的としては、氏族長の前で優秀な戦士を選抜することや軍事訓練などがあつた。また、ハイランド・ゲームズ内で踊られていたハイランド・ダンスも競技形式で行われていた。ハイランド・ダンスは競技であるが、氏族ごとに分かれて催されていたため、統一性は一切なかった。しかし、1950年にルールが統一され、スコットランド公式ハイランド・ダンス協会 (Scottish Official Board of Highland Dancing) が設立された。統一事項は、踊りの型が作られ、協会が設けたルールのもとでのみ競技会が開かれ、成績により技能階梯が決まるというものであつた。

社会学者の岡本 (2002) は、ハイランド・ダンスの競技システムには4つの規定がなされ、それにより民族舞踊のスポーツ化が成立したと主張している。4つの規定とは、何について競うのかの基準の明確化とどのように競うのかのルールの明確化、民主的手続きによる問題解決、中央集権的な踊り方・ルールのコントロールである。さらに統一された細かいルールについてみていくと、ハイランド・ダンスにはドレスコードが存在している。ドレスコードにそぐわない場合や踊っている最中に服装が乱れた場合は減点の対象となる。ハイランド・ゲームズやハイランド・ダンスに参加することはハイランド文化を大切にし、それを受け継ぐために参加していると考えられることもできる。しかし、ハイランド・ゲームズやハイランド・ダンスがスポーツである以上ユニホームとしてタータン柄のキルトを身に着けなければいけないという見方も可能である。岡本によると、ハイランド・ダンス・コンペティションの会場において自分たちの出番の前の少女達は薄着にソックスを下げた状態で練習をしており、観客の目に付くステージ上でも同じように練習をする人々が目に付いたそうである。スポーツをするため、本番前はリラックスしてウォーミングアップや練習を行うのは当然である。そのため、ハイランド・ダンスに参加している人々は文化の担い手ではなくサッカーや陸上をするようにスポーツとして参加していることを否定できない。そのため、ハイランド・ゲームズやハイランド・ダンスは伝統とスポーツを掛け合わせ現在に残る形にした例であると考えられることができる。またその結果、タータンが人々の目に付く形の文化として残っていると考えられる。

ハイランド文化の伝統性を考えるとキルトやクランタータン、ハイランド・ゲームズ、ハイランド・ダンスの例からタータンの伝統は昔からずっと同じであるとは言えないことがわかった。時代に応じてタータンの使われ方は変化してきた。以上のことからタータン繁栄の理由の1つとして伝統を変化させてきたことがあると判断できる。

2-4 ファッションとタータン

日常生活でもタータンを目にする機会が多々あり、マフラーやスカート、シャツの柄としてタータンが用いられていることからファッションとタータンの関わりがタータン繁栄に大きく関係していると考えられることができる。そのため、本節ではファッションの視点から見るタータンを基に繁栄の理由を探求していく。

ファッションの発展について考える際に考慮しなければいけないのが軍事との関係性で

ある。国際ロータリークラブの会員でアパレル会社を経営する中牟田（1981）は自身の著書においてエディンバラ城博物館で館長を務めたソーバンの主張を取り上げている。その主張とは英国軍のユニホームが現代のファッションに大きな影響を与えたというものである。日本の学校の制服として採用されていることの多いセーラー服もイギリス海軍が起源である。それ以外にもダッフルコートやピーコート、トレンチコートも軍服由来のコートである。ここではトレンチコートの例について詳しくみていく。マーケティング研究者の Birtwistle ら（2004）によるとトレンチコートの始まりは、雨天用コートの生地として 1888 年にイギリス人のトーマス・バーバリーが発明した、綾織のコットン生地であるギャバジンである。防水性と共に、夏は涼しく冬は暖かいという特性を持っている。この生地によって作られたコートが第一次世界大戦時に塹壕（トレンチ）で着用されたことからトレンチコートと呼ばれるコートが生まれたとされている。トレンチコートはイギリス軍からの要望で、軍が用いるための機能が集約されていた。1928 年頃を主体としてトレンチコートは街でも着用されるようになった。また中牟田によるとハンツマン社の会長を務めたパッカーは軍服のデザイナー出身である。ハンツマンは 1790 年設立で、高級フォーマルウェアを扱っている。伊勢丹などでも扱われており、世界中で知られているブランドである。現在において軍服を起源とするアイテムがファッションの主流となっていること、軍服のデザイナーを務めた者が企業のデザイナーになっていることから軍服がファッションに大きな影響を与えていると考えられる。

トレンチコートの生地であるギャバジンの特許を持っていた Burberry 社がコートの裏地に使用したのはバーバリー・チェックで馴染みのある、ベージュが主体の赤や黒、白で線の引かれたタータンであった。奥田（2013）によると Burberry が裏地にタータンを採用したのは 1924 年である。また奥田は 1960 年代のファッションショーで裏地以外にはじめて傘にバーバリー・チェックを用いたことや、1972 年のオリンピックで乗馬の選手が Burberry のトレンチコートを裏返しで腕にかけたことがバーバリー・チェックに注目が集まるきっかけになったと主張している。

タータンが軍服に用いられた例は他にもある。中牟田によると 1739 年にハイランド連帯のロイヤル・ハイランド・レジメントがタータンのブラックウォッチを軍服に採用したと主張している。ブラックウォッチは深緑を主体に濃紺、黒で線が引かれたタータンであり軍の名前がそのままタータンの名前となった。奥田は、ユニホームにタータンが採用されたのは 1739 年と 1748 年 2 つの説があると主張しているが、どちらの年代が正しいにせよ、タータンが軍服に用いられていたことは事実である。また中牟田は、ブラックウォッチはタータンの代表格としてユニバーサルタータンと呼ばれるようになったと主張している。その理由として、ハイランド連帯の世界中での活躍が挙げられる。奥田（2007）は、ブラックウォッチがスコットランド連帯の戦士として世界中に派遣され、タータンの用いた衣裳とその戦績で名をとどろかせたと主張している。

ソーバンや中牟田、奥田の主張を踏まえると、服作りの手本となる軍服にタータンが用

いられたこと、またその軍服が人々の目に触れる機会を得たことがファッションにタータンが取り入れられるきっかけになったと考えられる。ブラックウォッチの例のように、ファッションの参考となる軍服として世界で活躍する軍がタータンを用いていたことが、タータンがファッションに取り入れられた理由と考えることができる。

次に現代のファッションとタータンの関係について論じていく。現在でもなお、イギリスだけでなく世界中で有名な多くのファッションブランドがコレクションでタータンを使用している。イタリアのファッションブランド **VERSACE** は 2018 年の秋冬コレクションで克蘭をモチーフにし、タータンを用いたコレクションを発表している。またアメリカのファッションブランドである **THOM BROWNE** も 2018 年にタータンを使ったゴルフコレクションを発表している。このようにイギリス以外のファッションブランドも数多くタータンを使用している。そのきっかけと考えられ、タータンを象徴的に使用し成功したブランドが **Vivienne Westwood** と **Alexander McQueen** である。

まずは **Vivienne Westwood** について見ていく。世界各国のコレクションなどを取材する情報サイト **FASHION PRESS** によると **Vivienne Westwood** はイギリスのファッションブランドで、ヴィヴィアン・ウエストウッドが手がけるブランドである。ウエストウッドが大学生の頃反体制派のマルコム・マクラーレンと出会う。その後マクラーレンはブティックを経営し、ウエストウッドが売る服の生産を担った。マルコム・マクラーレンショップに出入りしていた若者にウエストウッドがデザインした服を着させセックスピストルズとしてデビューさせた。セックスピストルズがパンクムーブメントを引き起こし、ウエストウッドはパンクファッションという 1 つのジャンルを築き上げた。その後ウエストウッドは歴史にも興味を持ちクラシックとトラディショナルの融合を追及し、アンダーグラウンドから表舞台へと活躍の場をシフトしていった。以上が簡単な経歴である。

ヨーロッパ史研究者の **Simonelli (2002)** は、パンクファッションとは型にはまった個性や規則からの逃避であると主張している。先述したようにウエストウッドはパンクファッションのデザインを行っている。奥田 (2013) は、ウエストウッドは社会的なステイタスを無視し、仮装するような文化を創出する服をデザインしたと主張している。具体的に説明すると、社会に対する怒りや不満を表現するパンクロッカーに社会の秩序を作り出し守ってきた王族や軍隊が着ていたタータンを身に付けさせることや、本来男性が着用していたタータンを女性の衣裳に用いたりしたことである。また、自分でデザインしたタータンを登記局に登録した際にウエストウッドは「王族の印、伝統的なイギリスの象徴を自分の目的のために使わせてもらった。型破りなものを作るために型を使った。」(110-111) と述べている。**Simonelli** や奥田の主張からウエストウッドが型にはまった社会に不満を持ち、それを服で表現していたことがわかる。

ウエストウッドが型破りなデザインをするようになった理由として反体制派の考えを肌で感じていたことが挙げられるのではないだろうか。反体制的な考えから、社会的ステイタスを無視した服をウエストウッドがデザインした。その象徴にタータンを使用したこと

こそ、タータンが様々な層に受け入れられるようになった要因の1つと考えることができるのではないか。

次に Alexander McQueen について見ていく。FASHION PRESS によると、Alexander McQueen はイギリスのファッションブランドで、アレキサンダー・マックイーンが創業者である。マックイーンは形式的なものに反発があり、フランスのラグジュアリーブランドである GIVENCY のデザイナーを務めていた時期も酷評されることが多かった。あえてモデルを使わずにマネキンを使用し、またモデルの顔にペインティングをしてモデルの感情や表現力を取り除くなど型にはまらない表現が多かった。以上が経歴である。マックイーンの祖先にはハイランドのクランがいる。視覚文化研究者の Gordana Vreencoska (2009) は、マックイーンのアナリティカルアイデンティティにはスコットランドの伝統文化が含まれており、文化表現の自由や服を通じたアイデンティティ表現を大切にしていると主張している。

そのような考えや型にはまらない考え方でマックイーンは「ハイランド・レイプ」という題名のコレクションを 1995 年に発表している。ジャコバイトの反乱による禁止令や、ハイランド人が国外追放されたハイランドクリアランスをコンセプトにしたコレクションである。内容はぼろぼろのタータンを身にまとったモデルが血を付け、ゾンビのように歩くというものであった。ハイランド文化が無理やり奪われたことをレイプという言葉で言い表している。また、2006 年にはジャコバイトの反乱で亡くなった未亡人をテーマにした「カロッデンの未亡人」というコレクションを発表している。「ハイランド・レイプ」がタータンを用いた粗野なコレクションだったのに対し「カロッデンの未亡人」では悲哀に満ちた詩心が表現されていた。

GIVENCY のような一流ブランドでデザイナーを務めるような人物が過去の事実を理解しつつコレクションに用いたことにより、タータンがイギリス国外においてもファッションの要素として用いられるようになった要因の一つと言えるのではないだろうか。また、ウエストウッドやマックイーンはファッションデザイン研究家のノエル・パロモ・ロヴィンスキーにより世界で最も影響力を持つデザイナー 50 人にも選ばれている。日本における知名度から考えても 2 人が世界中に影響を及ぼしてきたことは否定できない。

本節では軍用品にタータンが用いられたことにより、タータンがファッションに取り入れられるようになったことを示し、さらにファッションに取り入れられるようになったタータンを世界的に影響のあるデザイナーが自分なりに解釈し、表現することによりさらにタータンの価値を高めたという考察を得た。これらのことから、タータンがファッションに取り入れられるようになったことがタータン繁栄の理由の1つと考えることができるのではないだろうか。

本章では地域性や、ロマン主義、変容性、ファッションの 4 つの視点からタータン繁栄の理由について分析した。その結果タータン繁栄の理由としてスコットランドが文化対立の激しい地であったこと、ロマン主義の思潮に乗ったこと、伝統を変化させてきたこと、

ファッションに取り入れられることにより価値を見出されたことであることが明らかになった。次章ではこれらのタータン繁栄の理由をもとに日本の伝統文化が繁栄するための手段について論じていく。

3 タータン事例の日本伝統文化への適用

前章ではタータン繁栄の理由について考察した。その理由としてスコットランドという特殊な地域における文化的対立、ロマン主義思潮へ適応、伝統の変化、ファッションへの応用の4つを挙げた。これらの理由をもとに日本の伝統文化に適用可能な部分がないかを本章では検討していく。

3-1 グローバル化における伝統工芸

タータンはスコットランドの伝統的柄である。しかし、タータンは洋服の柄として用いられることも多く、日常においても頻繁に目にする柄の1つである。日本にいながらも、日本の伝統的な柄である和柄より頻繁に目にする。そこで、本節では一地域の伝統的な柄でありながら世界中に広まっているタータン繁栄の理由から日本の伝統文化繁栄の方法について検討していく。

西洋文化が日本に入ってきた明治維新以降、日本国内での着物文化が衰退傾向にあることは確かである。比較文化研究者の梶谷（2004）はグローバリゼーションにより、様々な伝統が失われるのに伴って、少なくとも文化の一部が消滅し、二度と復興できなくなっていると主張している。伝統工芸の組合が自然消滅してしまうことが多々あるなど、文化の一部が消失してしまっていることは事実であろう。また経済産業省製造産業局伝統工芸品業室（2008）は伝統工芸品産業が直面する課題を挙げている。少子高齢化による人口の減少や国民の生活様式や生活空間の変化、生活用品に対する国民の意識の変化、大量生産方式による安価な生活用品の普及、海外からの輸入品の増加などである。少子高齢化以外はグローバル化が影響していると考えられる。安くて便利な製品が増えることにより、伝統工芸品の需要は低下してしまっているのである。

経済産業省に伝統工芸品として指定されることにより、国からの保護や助成を受けることが可能である。その条件は法律（昭和49年法律第57号）で定められており、5つの項目が存在する。1つ目は主として日常生活の用に供されるものであること、2つ目は製造過程の主要部分が手工業であること、3つ目は伝統的な技術又は技法により製造されるものであること、4つ目は伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるものであること、5つ目が一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又その製造に従事しているものであること、である。3つ目、4つ目の項目の内容からも政府が伝統工芸品に対して伝統を重視していることがわかる。しかし、ここで注目すべきは1つ目の項目である。日常生活で使われるものでなければ伝統工芸品の指定を受けることはできないという内容である。デザイン学研究者の多田羅（2017）によると、伝統工芸品の多くは江戸時代以降に全国各地で発生したものづくりを起源としており、伝統工芸品以外の地場産業も全国各地に存在しているが、それらは明治以降に西洋から入ってきた産業である。地場産業には愛媛県の今治のタオルや福井県の鯖江のメガネ、岡山県の児島のジーンズなどが含まれている。多田羅の主張を踏まえると、伝統工芸品指定要件の1つ目は、

現代において地場産業の方が当てはまっていると考えることができる。このことから指定要件には矛盾を感じてしまう。また、日常生活において需要があるものは経済効果が期待できる。そのため真に保護され助成されるべきものは、生活様式の変化とともに需要がなくなっていってしまった伝統的なものではないだろうか。

タータンは国の登記局がタータンの保存、保護を目的として登録を行っている。登録の依頼は世界中から届き、一般の人でも申請可能である。タータンと日本の伝統工芸品では状況が違っているため、登記局がやっていることを一概に全てを真似するべきとは言えない。むしろそのようなことは不可能である。しかし、日本の伝統文化であろうとグローバル社会の中でターゲットを世界に求めるような努力は必要ではないだろうか。

政治学者の柴田（2005）は伝統文化の市場を政府が率先して開拓した例として、インドネシアのバティックを挙げている。バティックとはインドネシアの伝統的な布製品であり、ろうけつ染めという製法で作られている。ろうけつ染めとは染める部分以外を蠟で覆う染色方法である。ジャワ島伝統のものはジャワ更紗として知られている。もともとジャワ島住民のものであったが、オランダからの独立以降、多民族の集合体であったインドネシアを統合するための文化的紐帯として、初代大統領であるスカルノ（1945～67）に採用された。スカルノはバティックのデザイナーとして若手デザイナーを採用し、地域性に捉われないバティックを作成させた。また、学校教育の場や公務員のバティック着用を奨励し、バティックをインドネシアの「国民服」へと変化させていった。さらにバティックは一地域の伝統工芸から脱却し、2009年にはユネスコの世界無形文化遺産に認定されるまでになった。現在では旧来的な意匠にとらわれない、斬新な作品が多く作り出されている。文化人類学者の塩谷（2016）は、バティックは東南アジアや日本でも販売もされ、アフリカのファッションにも影響を与えるなどグローバル展開されてきた布であると述べている。アフリカのファッションに影響を与えたかどうかは論点ではないので追及しないが、バティックの専門店が日本にもあり、専門の通販サイトも存在していることからグローバルに展開されていることは確かである。

バティックは政府が市場を開拓した例であるが、日本政府がすべての伝統工芸品に対してこのような保護をすることは不可能である。しかし、タータンの例を見てもバティックの例を見ても、昔の伝統がそのまま受け継がれているというわけではなく、プラッドからキルトが生まれたことや、バティックから地域性を取り除いたことなど、変化が存在している。また、日本の伝統工芸においても変化により新たな需要を見出した例がある。それが株式会社細尾の事例である。株式会社細尾は西陣織の卸を行っている会社である。あんしん経営をサポートする会（2007）が行った、代表取締役社長の細尾への取材によると、2002年に株式会社細尾は需要の低迷、取引先の倒産により初めて赤字に転落した。しかし、西陣織をインテリアやファッション、アートとコラボレーションさせることにより、利益を回復させた。その社長は「伝統とは革新の連続」と述べている。伝統は変化しなければいけないということを体現した例と言えるのではないか。これらの事例からもわかるよう

に伝統をうまく変化させ社会に適応させていくことこそ、伝統工芸を発展させていくうえでは必要であると言える。

日本において伝統工芸品の指定を受け、助成を受けるためにはあまり変化に寛容であってはいけないことがわかる。しかし、タータンやバティック、株式会社細尾の例からもわかるように伝統を変化させていくことにより新たな需要を見出すことができる。新たな需要を見出すことにより、伝統文化は続いていくのではないだろうか。そのため、伝統を変化させていくことが伝統工芸を繁栄させる方法の1つであると考えられる。

3-2 着物・和柄の繁栄

前節では日本の伝統工芸を繁栄させていくためには伝統を変化させていき需要を見出していかなければいけないと主張した。現在、経済産業省指定の伝統工芸品は約 220 存在している。その中で約四分の一が着物などの衣服に関するものである。その事実から、着物は日本の伝統工芸品の中でも重要な位置付けにあると考えられる。着物と密接に関わり、視覚的情報として大きな役割を担う和柄も伝統工芸と深い関わりがある。また、和柄はスコットランドにおいて伝統的民族衣装の柄であるタータンに立ち位置が近いと考えられる。そこで、本節ではタータン繁栄の理由の考察をもとに、日本の着物・和柄を繁栄させる方法を検討していく。

前章ではタータンがファッションに取り入れられたことがタータン繁栄の理由の1つであると示した。そのため、はじめにファッションの観点から着物・和柄を見ていく。西谷編集の『ファッションは語りはじめた』（2011）の中で、服飾史研究家の安城はモダンと着物の出会いについて論じ、西洋化していく日本において日常着としての着物を守ろうとした例を2つ紹介している。

1つ目は大正末期から昭和初期にかけて、洋風な着物が作られていった例である。当時和装と洋装その両方を街中で見つけることができた。その中でも特に注目されていたのが洋風な和装である。1900年代前半にフランスを中心としたヨーロッパで流行した幾何学的で直線を基調としたデザインであるアール・デコ調の着物や、表現主義や構成主義の絵画を彷彿とさせるリズム模様の着物などが作られた。他にも和柄では見ることができない、薔薇やチューリップ、ハート型などの模様の着物も作られた。

2つ目は1950年代に日常着としての着物が消え去る傾向にある状況の中で起こった、着物簡易化の例である。着付けが重要であり大変とされている着物において、着付けの簡易化を図ろうとしたのである。襟は抜かずに衿の合わせを深くし、帯を胸高に締めず、帯揚の無駄な線を見せないことにより着物特有の重さを取り除いたのである。また簡易化により、直線的な服である着物には存在せず、曲線的な洋服によって見せることのできる動の美を取り入れようとした。着物の簡易化も西洋化の影響を受けているのである。

これらの例からもわかるように、着物は日常生活の西洋化の中で生き残るための変化をしてこなかったわけではない。現代において日常着としての着物が根付いていないという

事実からも需要を見出すための適切な変化ではなかったと考えることができる。日常着の主流が和服から洋服になった現代だからこそ言える結果論かもしれないが、生活様式が和から洋へと変化していく時代の中で廃れていく和を主軸に起きつつ、西洋のエッセンスを取り入れていったからこそ、着物は日常着として廃れていったと考えることができるのではないだろうか。和を主軸とした例とは反対に、洋を主軸にした例も存在する。着物でブラウスを作るなど、ヨーロッパのセンスを基準に素材として着物を使うというものである。この動きが見られたのが 1900 年代前半の洋服が普及し始めた時期であり、日本において洋服の需要が少なく、マーケットも世界規模ではなく国内が主流であったため普及しなかったと考えることができる。1900 年代前半と現在では状況が違いすぎるため、着物の洋服の素材としての可能性は大いに残されているはずである。これらの例から、着物をメインにファッションに取り入れることで着物・和柄が繁栄する可能性は低いと推察可能である。

その一方で日本の伝統工芸が海外で注目されているのも事実である。生活科学研究者の谷田貝（2018）は、和服は海外で **KIMONO** として知られており、図柄や着装美、染色技術などが高く評価され世界に発信できる日本の文化のひとつであると主張している。鎌倉や京都など観光地に行くと必ず、着物を着用した外国人観光客を目にすることができる。このことから海外で和服に注目が集まり、外国人に認識されていることは間違いない。秋山（2015）による日経 **ONLINE** の記事において着物のリユース業を行う東京山喜株式会社社長中村健一への取材で、中村は売上の 2 割 5 分から 3 割は外国人が占めるようになったと答えている。また、同記事で欧州、中東、アジアから直接買い付けに来る客も増え、定期的に仕入れている業者の中には、2014 年にパリ 10 区で着物専門店を開店したところもあると答えている。このことからわかるように国内での需要の低下に反して海外での需要は増加傾向にある。様々な文化が混じりあうグローバル社会の中で着物や和柄が日本特有のものとして、価値を見出され、海外にも広がっていると考えることができる。それでは、このような状況の中で着物・和柄をさらに普及させていくにはどうしたらよいか。そのヒントをタータンの伝統の変化から見出すことができる。

前章において、タータンはロマン主義の流れに乗ったことが、繁栄の理由の 1 つであると主張した。そのため、着物・和柄においても思潮に乗るという同様のケースがあるかどうかを検討していく。着物において当てはまると考えることができるものは環境保護の考え方である。地球温暖化が進行している原因も環境破壊であり、日本でもエコという言葉を用い環境によい行動をする意識を感じることができる。国際会議においても議題に環境問題があがり、パリ協定では温室効果ガスの削減目標が定められた。環境問題は地球全体が抱えている大きな問題の 1 つであると考えることができる。環境破壊をこれ以上進行させてはいけないという意識は誰しもが持つべきものである。

環境問題が謳われる社会の中で着物はエコプロダクツと捉えることができる。環境学者の高橋ら（2018）は、着物はサステイナブルファッションであると主張している。その理由は数多く存在する。着物は基本的にフリーサイズであるため、洋服よりもカスタマイズ

が容易であり様々な体型の人が 1 つの着物を着ることができる。また、着物も出来上がりの形はすべて同じである。構造や作りが単純で、縫製には着物と同素材の糸が使われている。ほぼ直線縫いだけで縫製されているため、補修や仕立て直しが簡単である。さらに、着物は糸をほどけば再度長方形の生地にもどるため、着物使用后他の用途への作り替えも容易である。ボタンやファスナーが存在しないため、分別する必要もない。江戸時代では着物を焼却した灰も洗剤として使われていた。着物を着る際は肌着や襦袢を着てから着物を着るため、着物が直接肌に触れることがなく洗濯の頻度も抑えることができる。これらが、着物がサステイナブルファッションとみなされる理由である。

高橋らの主張からもわかるように、着物は環境によい面が多く存在している。成人式などで着物を着る場合においても、母からの譲りものを着ているという人を多く見かける。日常で着るものではないため、持ちが良いと考えることもできるが、娘にまで受け継ぐ価値のあるものであると考えることもできる。焼却後の灰を洗剤として使うまではやりすぎかもしれないが、衣類としての用途が終わったとしても、他の用途で使うことができるのは環境によい面であり、サステイナブルであるとみなすことができる。T シャツは綿からできていることが多いのに対し、着物は絹からできている。綿と比べると絹は光沢があり、高級感のある生地である。着物には和柄が付いているため、柄を利用した再利用も方法として存在する。様々な人がサイズを問わず着ることができ、再利用もしやすい着物はサステイナブルファッションとしての要素を持ち合わせており、エコプロダクツであると考えられるのではないかと考えられる。

伝統を変化させる観点からも着物・和柄の発展を考えることができる。伝統文様研究家であり着物の図柄のデザイナーでもある成願（2011）は伝統文化を後世に伝える方法としてデジタルデザイン素材の製作・販売や異業種・他分野への和柄の提供をあげている。異業種・他分野の例としてゲームやアニメなどの映像分野や、グラフィックデザインなどのデジタルコンテンツ、インテリア、パッケージなどがある。その理由として、時代のライフスタイルに即したものでなければ需要を得ることができず、それは着物に関しても例外ではないからとしている。また、古典柄の継承だけの画一化では衰退していきただけであり、他のデザイナーと同じく常に新しいデザインを生み出さなければならないと主張している。

成願の主張を踏まえると、異業種・異分野への和柄の提供は着物・和柄の発展には不可欠であると言える。着物単体としての需要が見込めない以上、他の分野への進出を考えることは当然であるようにも思える。しかし、和柄をベースに異分野への進出を考えることは大切である。アニメは日本文化として世界中に広まっている。漫画やアニメなどの日本文化を紹介するイベントであるジャパンエキスポは第 15 回目となるパリでは 24 万 7473 人の来場者を集めた。JapanExpo 公式サイト（2013）によるとアニメは 1980 年代からブームを迎え、1990 年代後半からフランスで漫画市場は発展を遂げた。フランスだけでなく

世界中で日本のアニメは上映されている。そのようなアニメに登場する柄を、伝統を知る人物が提供することにより、世界中の人が本格的な和柄を目にするきっかけになるはずである。グラフィックデザインやパッケージデザインを和柄の職人が手掛けることも同様である。和柄の認知が増えることが着物への注目にもつながるはずである。また、着物の和柄のデザイナーが需要のある分野で収入を確保することにより予算を着物の製作活動に回すことも可能である。和柄が日常的に目にする柄として普及することにより和柄に興味を持つ人も増え、後継者不足解決につながるのではないかと考えられる。また着物業界の活性化にもつながるはずである。

本節では、タータン繁栄の理由から、着物・和柄の発展について考察した。着物を軸にし、洋の要素を取り入れることは着物・和柄の発展につながる可能性が低い、エコプロダクツとしての需要は見出される可能性がある。また、着物の柄として和柄を捉えるのではなく、異業種・他分野に和柄を提供することにより、着物・和柄の発展を見出すことができよう。

本章ではタータン繁栄の理由をもとに、日本における伝統文化の保護へ適用可能な部分がないか検討してきた。その結果、伝統を変化させ新たな需要を見出していくことが必要であると結論付けた。また、着物・和柄に焦点を当てるとエコプロダクツとしてや異業種・異分野において需要を見出すことが可能であると論じた。

終章

現在グローバル化により、様々な文化が入り混じる社会になっている。そのような社会の中で伝統文化など様々な文化が衰退、更には消滅してしまっている。この状況を踏まえ、本論文の目的はグローバル化した社会の中で、伝統文化を後世に残す手がかりを見つけることであった。そこで本論文ではスコットランドとイングランドの対立、ローランド地方とハイランド地方の対立から衰退の一途をたどっていたが、今では世界中で見られる柄となったタータン復活の理由を探ることにより、文化繁栄の手がかりを詮索し、日本の伝統工芸品やタータンと同じ衣類である着物・和柄に取り入れられる部分があるか検証した。

第1章ではまず、日本でもよく知られているタータンチェックとはいったいどのようなものであるかを明らかにした。さらに、本論文におけるタータンの定義付けを行った。タータンとは日本で言われるチェック柄の一種であり、スコットランド伝統の柄である。作り方にも決まりがあり、縦糸と横糸が同じ構成でなければいけない。The Scottish Register of Tartans (スコットランド・タータン登記所) は決まり事がはっきりと存在するタータンの登録・保護・保存を行っており、世界中から申請が届いている。FCバルセロナや伊勢丹など世界中で有名な企業がオリジナルのタータンを持っていることから世界中にタータンが普及していることがわかる。今は世界中で知られているタータンであるが、1746年に出された禁止令によりタータンの使用が制限され、消滅しかけてしまう。禁止令の原因となったのがジャコバイトの反乱であり、さらにその反乱のきっかけとなったのがスコットランドとイングランドの合邦である。世界中で知られているタータンも文化的対立により一度消滅しかけており、そこから復活したことから本論文の目的に即した例であると示した。また、本論文におけるタータンの定義を柄として見た目がタータンとみなされるものとした。

第2章ではタータン繁栄の理由を4つの視点から考察した。4つの視点とは地域性、ロマン主義、変容性、ファッションの4つである。まず、1つ目の地域性についてである。文化などの違いからスコットランドとイングランドが対立関係にある。また、スコットランド内においても、ハイランド地方とローランド地方の対立が存在していた。アーブローズ宣言やジャコバイトの反乱の例からも、ハイランド地方とローランド地方の対立に比べ、スコットランドとイングランドの対立の方が根強いことを示した。他文化との対立により、タータンにスコットランドのアイデンティティを見出したことから、タータンが繁栄した理由の1つとしてスコットランドという特殊な地域における文化的対立の存在を挙げた。2つ目はロマン主義の視点である。タータンが禁止され、その後タータンの復活がみなされるまでの思潮にロマン主義がある。そのロマン主義の対象としてスコットランドがみなされたことがタータン繁栄に繋がったことを示した。3つ目は変容性の視点である。キルトやクランタータン、ハイランド・ゲームズ、ハイランド・ダンスの例から、タータンはずっと同じ伝統を受け継いできたわけではないことを示した。つまり、伝統を変化させてきたのである。4つ目がファッションの視点である。ファッションデザイナーが軍服を参考に服

を作っていた。またタータンも軍服に用いられており、そのブラックウォッチは世界中で最も有名なタータンの 1 つとしてユニバーサルタータンと呼ばれるようになった。また、ファッションブランドである Vivienne Westwood や Alexander McQueen がタータンに独自の解釈を加え、ファッションに取り入れることにより、タータンに付加価値を与えたことを示した。このように、タータン繁栄の理由には文化的対立、時代の思潮への適応、伝統の変化、ファッションへの応用があると考えられる。

第 3 章ではタータン繁栄の理由から日本の伝統工芸に適用可能な要素はあるかどうかを検討した。経済産業省による伝統工芸品指定のための要件を満たすにはあまり、変化に寛容であってはいけない。しかし、バティックや細尾の例から、伝統を変化させ新たな需要を見出していくことが伝統工芸繁栄には必要であると示した。そのため、タータンのような伝統の変化は日本の伝統文化においても取り入れるべきであると論じた。さらに、伝統工芸の中でも着物・和柄に焦点を当てるとエコプロダクツの 1 つとして環境保護の思潮に乗ることや、グラフィックデザインやアニメなどの異業種・他分野に和柄を提供することにより着物・和柄の新しい需要を獲得できるのではないかと考えられる。

本論文では、タータンを手がかりに伝統文化が繁栄する方法について考察した。その結果、タータンの繁栄に大きく関係していると考えられる 4 つの理由を見出すことができた。それらは文化的対立、思潮への適応、伝統の変化、ファッションへの応用である。この結果を基に日本における伝統工芸品の繁栄について考えると、伝統を変化させながら需要を獲得することが生き残るための方法の 1 つであり、具体的に着物・和柄を例に見ていくと着物のエコプロダクツとしての要素を主張していくことや、和柄をアニメやグラフィックデザインなどの気軽に目にすることができる物への応用が必要であるという結論に至った。そして、ただ単に洋服の柄の一種として見られているタータンについて研究・分析したこと、日本における伝統工芸の繁栄方法の手がかりを見つけることができたことに本論文の意義を見出すことができる。

参考文献

- Gordana Verncoska (2009). PLITICAL STATEMENTS IN CONCEPTUAL FASHIO:
THE VOICE OF NATIONAL SENTIMENTS AS A SELF-REFERENCE IN
THE READY-TO-WEAR COLECTIONS OF ALEXANDER McQUEEN AND
HSSEIN CHALAYAN. *Annual Review No.2*, 867-883.
- Grete Birtwistle, Christopher M. Moore (2004). The Burberry business model: creating
an international luxury fashion brand. *International Journal of Retail &
Distribution Management*. 32, 412-422.
- Quye Anita, Cheape Hugh, Burnett John, Ferreira SB Ferreira, Humel N Alison,
McNab Hamish. (2003). An historical and analytical, study of red, pink, green,
and yellow colours in quality 18th-and early 19th-Century scottish tartans. *Dyes
in History and Archaeology* .19, 1-12.
- Ross D Petty (2004).Of Tartans and Trademarks. *Trademark Rep*. 94, 859-880.
- Simonelli David. (2002). Anarchy, Pop Violence: Punk Rock Subculture and the Rhetoric
of Class, 1976-78. *Contemporary British History*. 16, 121-144.
- The Scottish Government. Scottish Register of Tartans. Retrieved January 7, from
<http://www.tartanregister.gov.uk/index>
- ヴィアール・ブリュノ (2012) 『100 語でわかるロマン主義』小倉孝誠, 辻川慶子訳, 白水社
- 大山彩子 (2015) 「多文化主義と多文化主義的政策の動向: イギリスを事例として」『生活
社会科学研究』22,79-88.
- 岡本純也 (2002) 「スコットランドの観光産業にける伝統スポーツ・民族舞踊」『研究年報
2002』36-42.
- 奥田実紀 (2007) 『タータンチェックの文化史』白水社
——— (2013) 『タータンチェックの歴史』河出書房新社
- 梶谷真司 (2004) 「文化的アイデンティティとグローバリゼーション—社会現象学的考察」
『帝京国際文化』17,121-152.
- 金沢美知子 (1989) 「ウォルター・スコットとロシア・ロマン主義文学」『スラヴ研究』北
海道大学(36),1-19.
- 河原由紀子, 高橋直子 (1994) 「スコットランドの民族衣装ハイランドドレス成立の背景を
さぐる」『金城大学論集 家政学編』33,9-18.
- 塩谷もも (2016) 「インドネシアにおけるバティック布の現状とアイデンティティ」『島根
県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』54,51-61
- 柴田徳文 (2015) 「伝統文化の継承と発展—伝統工芸の将来—」『Asia Japan Journal』国

- 士館大学アジア・日本研究センター(10),71-80
- 成願義夫 (2011)「和柄：伝統文化を後世に伝える為のイノベーション」『日本色彩学会誌』
35(3),219-222.
- 高橋和江, 大野貴子 (2018)「エコプロダクツとしての着物：東京染小紋の事例研究」『武蔵野大学環境研究所紀要』7,41-52.
- 高橋哲雄 (2004)『スコットランド 歴史を歩く』岩波書店
- 多田羅景太 (2017)「伝統産業とデザイナーの関わりについて」『デザイン理論』69,88-89.
- 中牟田久敬 (1981)『トラディショナルファッション—タータンチェックからボタンダウンまで』婦人画報社
- 西谷真理子編 (2011)『ファッションは語りはじめた』フィルムアート社
- ボブズボウム・エリック, レジャー・テレンス編 (1992)『創られた伝統』前川啓治, 梶原景昭訳, 紀伊国屋書店
- 谷田貝麻美子 (2018)「衣生活学習における和の布の活用：生活文化の継承から生活を豊かにするための製作まで」『千葉大学教育学部研究紀要』66(2),329-332.
- 横川善正 (2002)『スコットランド石と水の国』山川出版社
- 『Genius 英和大辞典』(2001)大修館書店
- 『スーパー大辞林 3.0』(2006)三省堂
- 秋山知子 (2015)「40兆円の眠れる資産キモノを観光資源に」『日経 ONLINE』
<https://business.nikkeibp.co.jp/article/interview/20150303/278192/>
(最終閲覧日：1月7日)
- あんしんの経営をサポートする会 (2007)『初の赤字転落をきっかけに月次決算・予算管理の仕組みを導入 新たな経営理念のもと、伝統産業の革新に挑む』
http://www.ansin.jp/entrepreneur/pdf/nv_200701.pdf
(最終閲覧日：1月7日)
- 石田洋服店「Century Original Tartan」<http://oshitate.com/wp/fabric/original-fabric/century-original-tartan/> (最終閲覧日：1月7日)
- 経済産業省製造産業局伝統工的工芸品業室 (2008)「伝統工芸品をめぐる現状と今後の振興施策について」
<http://www.meti.go.jp/committee/materials2/downloadfiles/g80825a07j.pdf>
(最終閲覧日：1月7日)
- 四季の美 (2018)「伝統工芸品とは？伝統工芸業界の現状と生産高推移、職人後継者について」<https://shikinobi.com/traditionalcrafts-info>
(最終閲覧日：1月7日)
- JTS グループ (2013)「JapanExpo の歩み」JapanExpo 公式サイト
http://www.japan-expo-france.jp/jp/menu_info/japan-expo_100676.htm
(最終閲覧日：1月7日)

————— (2016) 「JapanExpo とは」 JapanExpo 公式サイト

http://www.japan-expo-france.jp/jp/menu_info/japan-expo_100675.htm

(最終閲覧日：1月7日)

FASHION PRESS 『Vivienne Westwood』 <https://www.fashion-press.net/brands/92>

(最終閲覧日：1月7日)

FASHION PRESS 『Alexander McQueen』 <https://www.fashion-press.net/brands/2>

(最終閲覧日：1月7日)